ヒトラー崇拝

田　中　晶　子

序論

アドルフ・ヒトラーという人物は、今となっては歴史上最も極悪卑劣な独裁者として世界中に知られている。しかしもしそうであるならば、なぜヒトラーはあれほどまでに一般大衆の支持を得ることができたのであろうか。

その理由として一般に指摘されるのは次の点である。第一次世界大戦の敗北により、民衆の生活は貧しくなり、ヴェルサイユ条約で過酷な条件を突きつけられた。それによりドイツ国民は冷静な政治判断ができなくなり、アドルフ・ヒトラーという一人の男にすべてを託してしまった。ヒトラーが政治をより明確にわかりやすく大衆に伝え、貧しい生活が、ユダヤ人や今の政治体制に責任があるのだと力強く演説したために、大衆は彼に魅了されていった。しかし大衆が信じたものは、すべてヒトラーとナチがプロパガンダによって作り出した虚像であった。何よりも第一次世界大戦の過酷な政治・経済状況が、民衆にヒトラーを支持させた最も大きな要因であった――。

しかし筆者は、大衆の信じたものはすべてヒトラーとナチが作り出した虚像に過ぎないという点に関して、疑問を抱いている。つまり本当にそれだけで、ナチズムはあれほど多くの大衆の支持を得ることができたのだろうかということである。ヒトラーにすべてを託し、彼に貧しい生活の中での唯一の救いを求め、挨拶や儀式などによってヒトラーを讃え上げるといった現象――筆者はこれを「ヒトラー崇拝」と呼ぶ――は、どのようにして生じたのであろうか。そもそもヒトラーが権力を握った時代、シンボルをめぐる闘争はすさまじい展開を見せていた。ナチに限らず、どの政党も自分たちのシンボルを掲げて、

その闘争に勝とうと必死であった。仮にナチスが新しいプロパガンダとして何か儀式を始めたとしても、他の党がそれを真似ることは可能であったはずである。そういった意味でも、プロパガンダだけで大衆を信じさせることは難しかったと考えられる。

また「近代化」による混乱を強調する議論にも、疑問の余地があるように思われる。「近代化」論の立場からファシズムを研究してきた山口定は、ナチズムが民衆の支持を得た理由の一つとして、とりわけ敗戦と崩壊が「近代化」を促進したことを挙げている[1]。山口によれば、敗戦と崩壊によってドイツ人の家族や教会などに対する伝統的な忠誠心が破壊され、下層社会の出身者を大量にエリートの座に押し上げたのだという[2]。そしてそこで上昇したエリートたちが、党権力の中核をなしていたというのである[3]。山口は、それまでの「社会的流動性」を欠いていたドイツ社会が、敗戦と崩壊を契機に大きく変容し、統治エリートの構成もこの時代にかなり顕著に変貌したという見解に立っているのである[4]。更に山口は、ナチ・エリートがアブノーマルな人々であったということを強調する[5]。しかしアブノーマルであるというのはかなり曖昧な言い方であり、また党権力を支えていたのは、やはりその下にいる大衆だったのではないかという疑問がぬぐえない。ヒトラーは底辺の人々にあわせて演説を行い、焦点を当てるのにこだわったことからもそのように考えられる。

なぜヒトラーがあれほどの大衆的支持を集められたのかという問いに答える際、重視すべきなのはヒトラーの言動と大衆の心理との相互関係であり、そこで参考になる先行研究は、エーリヒ・フロムとイアン・カーショウのものである。

エーリヒ・フロムは、フロイト流の精神分析によって、ナチ支配がなぜ起きたのかを心理的要因と社会的要因との相互作用から説明している。フロムによれば、ナチ政権に屈服した労働者階級の人々は、1918年の革命における最初の勝利の後に、彼らが喫した敗北による疲労とあきらめにより、簡単に屈服してしまったのだという[6]。そしてフロムもまた敗戦と君主制の崩壊、インフレに大きく原因があるとし、それを心理的に分析している。それらによって、民衆自身の生活の基礎は打ち砕かれ、長年かかって作った貯蓄も、自分自身の過失でもないのに失われてしまった。いったい何を信じたらよいのだろうか、

という民衆の心理状態を、ヒトラーはうまく利用したというのである。さらに、ヒトラーが政府の権力を握った以上、ヒトラー率いる政府がドイツそのものであり、彼に戦いを挑むことは、ドイツという民族共同体に反旗を翻すことを意味していた[7]。フロムは、「政治的経済的要因を強調するあまり、心理的要因を排除してしまうような説明も――あるいはその逆も――いずれも正しくない。」と述べている。フロムによれば、ナチズムはまずは心理的な問題ではあるが、心理的要因それ自身は社会的要因によって形成されたものと理解されねばならないという。またナチズムは、まずは経済的・政治的な現象ではあるが、それがすべての人々を捉えたことは、心理的基盤において理解されなければならないという[8]。つまりフロムは、この心理的側面、社会的側面という二つの要因の比重は同じであると見ている。ちなみに山口定も、ナチズムが民衆のエネルギーをプロパガンダにより巧みに引き出し、ナチズムの爆発的なダイナミズムが展開できたと同時に、民衆は貧しい生活の中で、ナチのプロパガンダへ逃げる道を見つけざるを得なかったとしている[9]。

イアン・カーショウは、彼の著書『ヒトラー神話』において、ヒトラーの巨大な名声は指導者それ自身の中にあったのではなく、「彼を崇拝した人々」の心の中にこそ求めるべきだと考えている[10]。つまり、現実にヒトラーがどうであったかよりも、数百万のドイツ人によって彼がどう見られていたかが問題となるというのである。彼はナチズム研究を「心像の研究」として捉え、民衆がヒトラーに対して抱いたイメージが、ナチ政権に大衆的基盤を与えることでいかに大きな統合機能を発揮したかを明らかにしようと考えたのである[11]。こうしたことがナチ研究に必要なのであり、これまでの、ヒトラーを批判的にだけ見る研究や、初期ナチズムだけ、またヒトラー内閣成立の時点でのみナチズムのイメージを固定させてしまったり、末期の反ユダヤ主義、強制収容所のすさまじさだけでナチズムを理解しようとしたりするのは正しくないと考えられる。

この論文では、ナチズムの内部から「ヒトラー崇拝」という現象が生じ、それが発展、定着したのち、やがては衰退し崩壊していった過程を、ヒトラーと大衆との関係を中心に見ていく。そして「ヒトラー崇拝」がどのような構造をしていたのか、ということを明らかにしたい。つまり民衆の信じたヒトラー

像はどのように創られていったのか、またヒトラーの側近が彼にどのような影響を及ぼしたのかということを明らかにするのである。その際、ヒトラー自身がどのような思いで政治家になったのか、ヒトラー自身の内に秘めた説明しがたい魅力というものがあったのではないかということも併せて見ていきたい。つまりヒトラー自身の魅力、ナチのプロパガンダ、そして民衆によるヒトラー・イメージの受け止め方、この三つの関係から「ヒトラー崇拝」の構造を解いていこうとするのである。

第一章　ヒトラー崇拝の出現

1．政治家ヒトラーの誕生

アドルフ・ヒトラーは、政治家を志すまでにかなりの時間がかかっている。青少年時代のヒトラーは、これといって際立った才能を持っていなかった。画家になるという目標が失敗に終わったヒトラーは、それでも絵を描き続け、徴兵検査にも出頭せず、警察に追われるほどであった。だが第一次世界大戦が勃発すると、オーストリアという多民族国家に対する苛立ちや、大ドイツ主義的なドイツ統一国家への憧れが強くなり、政治に対する態度が変わり始めたのである。『わが闘争』においても、「私がオーストリアを去ったのは、第一に政治的理由からである。」とあるように、このころのヒトラーが少しずつ政治に目覚めていった様子が見て取れる[12]。また、「ハプスブルク家のために戦いたくなかった。しかしわが民族と、その具体化されたドイツ帝国のためにはいつでも死ぬ覚悟があった。」と述べていることからわかるように、ヒトラーはウィーン時代に得たオーストリアとマルクシズムへの怒りをぶつける機会を、ついに第一次世界大戦において見出したのである[13]。こうしてヒトラーの異常なまでのドイツへの執着が始まる。ヒトラーは戦争で前線兵士として必死に戦ったにもかかわらず、敗戦という屈辱を味わった。さらにドイツでは革命が勃発して皇帝が退位し、ヴァイマル共和国が成立した。ヒトラーはこのような絶望の中で、徐々に政治家への道を歩んでいったのである[14]。ヒトラーはまず軍隊の上官から、兵士大衆を指導するという任務を負わされ、啓発宣伝家になるための訓練を受けることになった。そうしたころヒトラーは、ゴッドフリート・フェー

ダーの理論に接して強い感銘を受け、これを自分の思想的基盤とするようになっていった[15]。フェーダーの理論によってヒトラーは、「新党樹立のための一番本質的な前提の一つに対する道を発見した。」と述べている。また、フェーダーの急進的な資本主義批判は、ヒトラーには学問的に異議をさしはさむ余地のないものであるように思われた[16]。周囲にはヒトラーの弁舌の才能に気づくものも多数出始め、ナチス党（NSDAP）の前身であるドイツ労働者党（DAP）は、ヒトラーに自党への入党を懇願した。DAP は反ユダヤ主義的な新聞に最初の公開集会開催の広告を出し、ヒトラーはこの集会に参加することにした。ミュンヘンのビアホールで初めて 30 分の大演説を行ったヒトラーは、その演説の才能を遺憾なく発揮した[17]。こうして 1919 年10月19日、ヒトラーは 30 歳で熟慮の末、DAP への入党を承知した。ヒトラーは敵国から、より効果的な宣伝方法を学習し、自分の演説により聴衆の心を動かすことができると考えていた。しかし DAP 入党の時点では、ヒトラーはまだ自分が将来指導者になるなどとは考えていなかったように思われる。

2．政治家ヒトラーの挫折

DAP 入党後、ヒトラーは党勢拡大のために演説を多数行い、1920 年 2 月には党名を国民社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）へと変更した[18]。こうした地道な努力により、ヒトラーの党内における支持は圧倒的なものとなっていった。ヒトラーはいかに民衆の支持を得るか、いかに党勢を拡大するか、自分にとって都合のいい人物をどれだけ味方につけるか、そして党における自分の地位をいかに確保するかを重視するようになっていく。こうした中、ヒトラーはすぐに行動を起こさなければ、支持者が共産党に転向してしまうのではないかと焦り、1923 年にミュンヘン一揆を起こした[19]。このときまだバイエルンでのヒトラーの地位は確立していなかったので、この無謀な武装蜂起は失敗に終わる。だがこの失敗こそが、後のヒトラーの政治活動を大きく変えていくのであった。つまりヒトラーは次の成功を手にするために、自らの戦術を考え直し、いかに合法的に支持を集めるか、民衆に自発的にナチスを選ばせるかということを考えるようになっていくのである。

3．政治家ヒトラーの擡頭

ミュンヘン一揆の失敗により逮捕されたヒトラーは、監獄の中で今後の活動について考え、勉強し、囚人たちと連日「講座」を開いた[20]。ヒトラーは自分に盲従する私設秘書ルドルフ・ヘスとエミール・モリスに『わが闘争』を口述筆記させる。わずか半年で仮出獄をしたヒトラーは、自分の不在中に党内部が混乱していたため、もう一度初めからナチス党を立て直す必要があった。初めは思うようにいかなかったが、1926年、後に党内の最も雄弁な宣伝家となるヨゼフ・ゲッベルスがヒトラーの信奉者となり、ヒトラーは自分の路線を党内で改めて確立し、ここから権力獲得への絶え間ない努力が始まるのであった。

「ヒトラー崇拝」は、まずは党員の間で広まっていった。ヒトラー自身がまだ指導者としての自覚を持っていないときでも、ヒトラーを支持し、盲目的に従い、監獄へ送られたヒトラーの帰りを待ちわびる党員の間で、「ヒトラー崇拝」は最初に出現したのである。彼らは互いに、ヒトラーへの献身の度合いを競い合ったのだった。ヒトラーの権力獲得への努力がようやく認められるようになるのは、1929年の世界恐慌のときのことであった。ヒトラーはこの経済危機を効果的に利用し、ゲッベルスやシュトラッサーが党の宣伝に新聞を活用したので、ナチス党が一気に拡大を見せたのだ[21]。すでにこのころ310万人を上回るナチス党員の間で、「ハイル・ヒトラー」の挨拶も確立していた。1930年以降、党以外の新聞にもヒトラーの名が見出しに出ない日はないほどであり、民衆はその名を目にする機会が増えていった。ヒトラーは選挙活動で、民衆に対する訴えにより一層力を入れた。飛行機を使って各地へ行き、ドイツの強大化、賠償支払い拒否、ヴェルサイユ条約破棄、全ドイツ人に職とパンをという訴えを、ヒトラーは民衆に伝えた[22]。貧しい生活の中で民衆が見た光こそヒトラーだったのである。ヒトラー演説をより効果的にしたのは、ナチス党の宣伝が創り上げた偉大なヒトラーのイメージであった。こうして民衆はナチス党の雰囲気にのまれ、ナチス党は国会議員選挙での得票数を急激に増やし、大躍進をとげた。民衆による「ヒトラー崇拝」も徐々に始まり、ヒトラー自身の指導者としての自覚も芽生えていった。ヒトラー自身、自分の権力を手にするためにあらゆる手段を使い、利用する価値のある人間をとことん利用して

いった。こうしてナチス党は第一党へと躍進し、ヒトラーの計画通り、ヒトラー内閣の大筋が決定し、ついに1933年1月30日、ヒトラーは首相に任命されて「ヒトラー崇拝」は名実ともに完全な幕を開けた。この後、「ヒトラー崇拝」はさらなる発展を遂げるのである。

第二章　ヒトラー崇拝の確立

1.「総統国家」の成立

1933年1月30日、連立政権として組閣されたヒトラー内閣は、次第に他党を排除してナチス一党独裁体制へと移行していった。この独裁体制樹立を決定的にしたのが、国会議事堂炎上事件とレーム事件である。ナチス党はこの事件を、さらなる権力拡大のために最大限利用しようとした。国会議事堂炎上事件では、民衆が動揺を隠しきれずにいる中、ナチス党機関紙は、凶悪な共産主義者の陰謀が、ヒトラーの命令で間一髪のところで阻止されたと大々的に宣伝した。つまりこの火災は、共産主義者によるテロ活動開始の合図だと書きたてたのである[23]。事件翌日の閣議では、すでに起草されていた大統領緊急令が審議・承認され、ヒトラーはヒンデンブルク大統領を訪問した。大統領は緊急令に異議なく署名し、この命令は即日発効した[24]。

1934年6月30日のレーム事件（長いナイフの夜）とは、レームが指揮する突撃隊が、強力な反ヒトラー組織になりかねないと危険視し、ヒトラーが国防軍の暗黙の了解を得て、自分に忠誠を誓うナチス親衛隊に命じて突撃隊幹部の「血の粛清」を実行したという事件である。ヒトラーとレームとが対立すると、ゲッベルス、ゲーリングらはヒトラーの側につく決心をし、レームに関する情報を集め、彼のスキャンダルを流してはヒトラーの耳に入れるようにした。1934年6月初めに、ヒトラーはレームと会見して最後の説得を試み、SAを7月いっぱい休暇にするよう命令した。これで両者の衝突の危機は回避されるかに思われたが、この後もヒムラーとゲーリングは、ヒトラーがおかれている危険な状況について懸命にヒトラーに吹き込んだ。ゲッベルスも、レームが休暇中のSAに6月29日に任務に復帰せよという命令を出したというニュースを捏造した[25]。ヒムラー、ゲーリング、ゲッベルスは、ヒトラーのためとい

うよりは、彼ら自身がライバル視していたSA隊員たちに対する個人的な恨みにより、突撃隊の脅威をヒトラーに吹き込んでいたのである。このような恐ろしい事件がヒトラー政権を強固なものにした理由は、民衆が嫌悪感を抱きやすいレームの私生活を暴露した点にあった[26]。プロパガンダが描き出した道徳の保持者としてのヒトラー・イメージは、明らかに汚職と同性愛に対する一般民衆の批判もしくは偏見と密接に結びついていた。

このように、権力はもはやヒトラー一人によっては掌握できなくなっていた。とりわけヒトラーの側近により都合のいいように利用され始めたのである。

2．プロパガンダの手法

(1) ハーケンクロイツの勝利

ナチズムのシンボルはハーケンクロイツである。ハーケンクロイツはヒトラーのポスターやナチス党大会などを彩り、誰もがそれを目にするだけでナチスを思い浮かべた。しかしシンボルの利用は、ナチスの専売特許ではなかった。ヴァイマル共和国時代には、ナチス以外の政党もシンボルを利用して宣伝活動を行っていた。ハーケンクロイツは1920年8月7日、ザルツブルク会議において公式にナチスのシンボルとなり、1935年には国旗とみなされるまでになった。ドイツ人にとってハーケンクロイツは、伝統として受け継がれていくものとされ、その旗には反ユダヤ主義が表現されていた[27]。ヴァイマル共和国の生みの親であった社会民主党（SPD）は、ナチスに対抗して新たなシンボルを生み出し、最後まで闘った。SPDの生み出したシンボルは「三本矢」であった。この「三本矢」は、誰が書いたかも分からない壁のいたずら書きに由来するもので、ハーケンクロイツを抹消するという意味が込められていた[28]。またSPDは、ナチスが考案したドイツ式敬礼である「ハイル・ヒトラー」に対して「フライハイト」という独自の挨拶も作っていた。ナチスと同じように、SPDは「三本矢」の旗を至る所に掲げて街頭を行進し、同じように選挙戦にも利用した。しかし、ナチスに対しあらゆる手段を使ったにも拘らず、SPDは完敗した。なぜなら拘束される「教義」や「綱領」を持たず、シンボルを用いた宣伝に徹するナチスに対して、SPDはあまりにもマルクス主義の「教義」に拘束さ

れ、唯物論的発想から心理的分析を軽視して選挙戦に臨んだからである[29]。ヒトラーが『わが闘争』で以下のように述べているのは、やはり的を射ていたということになるだろう。「宣伝の課題はまさしく、ポスターの場合同様、群集に注意を喚起することになければならず、もともと学問経験のある者や教養や見識を求める教化にあるのではないので、常にその作用よりも感情に向けられ、・・・宣伝はすべて民衆的であるべきで、その知的水準は宣伝が想定する対象の中で最低級の知能が理解できるように設定すべきである[30]。」それどころか、ナチスのハーケンクロイツの存在感が圧倒的だったので、「三本矢」を用いるSPDの宣伝活動が単なるナチス党のそれのコピーであるといったような批判まで出てきてしまったのだった。

(2) 儀式の演出

祈ることで苦しい現実を解消しようとしたのか、ナチス時代には宗教的祭儀を思わせる政治集会がしばしば催された。こうした集会には、行進、敬礼などの一斉行動と並んで、キリスト教の伝統を思わせるような要素が取り入れられていた[31]。具体的には、政権獲得の日（1月30日）、ヒトラー誕生日（4月20日）、民族クリスマス（12月25日）などの機会に行われた儀式がそれである[32]。キリスト教の儀式でいう「参入歌」は、ナチズムの政治集会では総統の言葉に置き換えられた[33]。またナチスの儀式は、民衆の私生活にも及んでいた。それは私生活における祝祭的な出来事を公共化し、新しいナチズムの祝祭習慣に引き入れようとする努力に他ならない[34]。これらは一見ささいな意味しかもたないようだが、明らかにキリスト教における洗礼や結婚などを消滅させることが意図されていたのだろう。儀式の内容はナチス独自のものであるにせよ、ナチの祭儀がキリスト教の伝統から生まれたのは確かである。しかしそれは、キリスト教と全く同じでもいけない、それに代わるものを作りたいというヒトラーの考えにより、形式のみをうまく利用したのだった。

一般大衆の間での身近な挨拶にも大きな変化が現れた。そもそも挨拶というものは、歴史的に変化するものであり、地域によっても異なる[35]。その挨拶を、ヒトラーは権力掌握後に統一へと向かわせた。この点では、イタリア・ファシ

ズムにおけるものより、ナチスにおいての方がはるかに顕著な発展を遂げた。1935年1月22日の内務省による指示は次のようなものであった。「・・・フューラーとの連帯感をドイツの挨拶表現の形により、忠実に行っていくことで表し、一般労働者にも義務づける。今、このときから公務員、労働者にそのドイツ挨拶を仕事内でも用い、同時に右手を（障害のあるものは左手を）上にかざし「ハイル・ヒトラー」とはっきり述べることを命ずる。また、私的付き合いも同様であり、文書のやりとりにおいても「ハイル・ヒトラー」で終えること[36]。」この挨拶の統一は、権力強化だけが目的ではなく、多様に存在する挨拶を統一するためのものであった。つまり面倒な礼儀作法の決まりや、地域ごとに違う挨拶を統一し、国内の人々の交流を活性化しようとしたのである[37]。

ナチスの祭儀の中で最も盛大に行われたのは、ニュルンベルクでのナチ党大会であった。巨大な示威集会のために派手な、あるいは壮大な演出手段がふんだんに投入され、大衆の一体感を効果的に盛り上げた[38]。これらの祭儀の意味を分かりやすくするのは、やはり宗教的な要素であり、「神聖な」とか「聖別された」といったようなキリスト教を連想させるような用語が多く使われたので、人々にとって受け入れやすいものとなっていった。こうしてナチスは、聴覚からも視覚からも民衆に働きかけ、現実には把握されることのない民族共同体を、祭儀を通して民衆の眼の前に美しい幻想として表現してみせたのである[39]。

ナチズム以前の民衆にとって政治というものは遠く、自分には関係のない存在かのように思われたが、こうした祭儀によって民衆は自分たちも政治に参加していることを自覚し、圧倒的なナチの存在感に陶酔してしまったのである。

(3) 演説の工夫

ヒトラーの演説は、これまで述べてきた通り絶大な力を持つものであった。民衆を陶酔させる彼の言葉には、数々の工夫、とりわけ擬似宗教的要素が含まれていた。

ヒトラー演説の特徴として挙げられるのは、芝居がかった言い方、理解しやすい言葉の反復、そして曖昧な表現である。ヒトラーにとって演説は芝居であったが、民衆にとってはそれが現実なのだった。あらゆる準備が整い、恐

ろしげな声、表情、身振りを伴ったヒトラーの演説を聞いていると、民衆はふとヒトラーを信じてしまう。こうしてヒトラーの演説は、奇跡のような説得力をもって聴衆に語りかけ、そして聴衆がこれに応じるのである[40]。その演説は、いつも地方あるいは国レベルの成功とタイミングを合わせて、すぐその後に行われるのである。また演説は、午後遅く、夕刻に行われる場合が多い。これは、ヒトラー自身が、この時間帯にはちょうどよい緊張が生まれ、また期待が高まる雰囲気が醸成されると語っていることからくる[41]。ヒトラーは、自分の持つ弁舌の才能に気づいたときから、演説に対する自分の考えを貫き通し、練習時間も惜しまなかった。政権獲得前に選挙で票を得るために行った演説と、政権獲得後の演説の間には、ほとんど違いはなかった。おそらく演説に対するヒトラーの思いには、特別なものがあったのだろう。『わが闘争』で述べている、「運動の躍進に対して決定的なのは、偉大な文筆家ではなく偉大な演説家のおかげだ。」という言葉こそ、ヒトラーの最も重要な信念であった[42]。

ヒトラーは『わが闘争』において、「大衆の感受性は複雑でなく、極めて単純で閉鎖的である。そこにはニュアンスの相違はなく、肯定か否定か、愛か憎しみか、正義か不正か、真か偽かの区別しかない。」と述べている[43]。ここには、大衆の情緒的な感受性に相応して論点を明確に、そして何より単純化すること、またそれを繰り返し伝えること、断固とした口調で断定化することによって、民衆に情報を伝え確信してもらう手法があった。その中でも情報が問いと答えのセットになった形で表れることがよくある。つまりヒトラーが投げかけた問いに対して、民衆が一斉にその答えを叫ぶというものである。しかし、ここにもヒトラーの工夫はもちろんあった。そこでの問いというのは、すでに周辺の事情がよく知られたものなのだった。まったく新しい事柄に対する問いであれば、民衆はその場で初めて耳にするのであって、当然聴いていない人にはわからないし、全員がその新しい情報を理解するのは困難だからである。すでに提出されている問いであれば、民衆の認識度も高く、何となく聴いているだけでも十分に理解でき、受け入れやすいものとなるのだった。またその問いは、答えがたくさんあってはならない。例えば、「君たちは何を望むか」といったような抽象的な質問では、答えが一つにまとまらず、民衆が全員で一緒に答

えることができない。ゆえに民衆全員が答えられ、同じ答えを口にすることができる問い、すまわち「君たちは・・・・を望むか」というように、賛成（Ja）か反対（Nein）の答えしかない決定疑問文となるのである。「どちらを望むか」など、少しでも選択の余地を与えるようなものであってはならないのである。その具体的な例として、1936年に行われたある演説がある。ヒトラーは、「ドイツ国民に向かって尋ねる。ドイツ国民よ、汝は我々とフランスの間では今やついに戦いの斧は葬られ、平和と理解がもたらされることを望むか。汝がそれを望むなら「賛成」といえ」と民衆に問う。すると民衆は一斉に「賛成」と答える。「ドイツ国民にさらに尋ねる。我々はフランス国民を圧迫してその権利を削減することを望んでいるか」すると聴衆は「いや、我々はそれを望まない」そしてヒトラーが、「私は自らに問う。平和を望まない輩はいったい誰かと。泰平を望まず、和解を望まず、絶えず扇動し、不信の種をまかずにいないものはいったい誰か。」―会場から「ユダヤ人だ」という合唱が生じ、「その通り」の後の数分間は歓声につつまれる[44]。平和という、人々を安心させる言葉を最初に持ってくることで、自分は平和を望んでいるのだということを民衆に示すのである。最初の問いが最も重要であって、その後の問いは、それにつながるものと考えられた。どのような質問がされても、民衆はその場の雰囲気に呑み込まれ、ヒトラーの意見に同意してしまうのである。また、民衆の不満の原因をユダヤ人に向けることで、ヒトラーはユダヤ人に対する民衆の憎悪を煽った。情報は、ヒトラーが提示する問いと答えのやりとりの中で伝えられた。演説者と聴衆の間に信頼感、一体感を醸成することによって、ヒトラーは民衆に、政治に参加している、情報を共有しているという安心感を与えるのである。当時のドイツ民衆は、第一次世界大戦での敗北や政治的不安定などによって、生きる上で頼りとなる方向づけを失い、その批判的な判断力も弱められていた[45]。このような状況で、ヒトラーの自信に満ちた演説は、民衆に新しいドイツを約束し希望を与えることができた。

曖昧な表現も、演説の工夫の一つであった。それは、ナチズム体制下の残虐な政策や行き過ぎた暴力行為などの政治の現実をカモフラージュするためのものであった。例えば、「オイタナジー」（安楽死）という外来語は、無力な

精神障害者の殺害を偽るものであったし、「最終的解決」という言葉の裏には、恐ろしいユダヤ人の大量虐殺が意味されていた。この時代においては、こうしたナチ用語が数多く存在した。そうしたナチ用語には、ユダヤ人に関する用語が最も多かった。ヒトラーは「全ユダヤは闘いを望んでおり、その闘いを続けていくことになる。」と述べ、ユダヤ人の歴史を説明することで民衆にユダヤ人への憎悪を植えつけ、この反ユダヤ主義を利用して大量虐殺へと導いていったのである[46]。こうして政治集会におけるヒトラーの演説は、以前のような啓蒙や討議の手段であることをやめ、政治的主張をするための武器となっていったのだった[47]。

最後に、擬似宗教的要素も演説の重要な要素であった。つまりヒトラー演説には、聖書や教会生活からとられたイメージや宗教的な表現が見られるということである。聖書を思わせる演説の具体例を挙げると、聖書の文句が見事なまでにモンタージュされて、荒野でのキリストの叫び（ルカ伝 3章4節）を最初にほのめかせた後、ヨハネ伝のキリストの顕現「見ないで信ずる者はさいわいである。」という超越的信仰の勧告が持ち込まれる。さらに「諸君のすべてが私を見ているわけではない。」という部分は、ヨハネ伝の「しばらくすれば、あなたがたはもう私を見なくなる。しかし、またしばらくすれば、私に会えるであろう。」をほのめかせることで、救世主との類比をさらに強調したものとなっている[48]。また、「君たちはかつて一人の人の声を聞いた。その声は君たちの心を打った。その声は君たちを目覚めさせ、君たちはこの声に従った･･･」というのは、ヨハネの福音書にある「その羊も私の声を聞き分ける。こうして羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる・・・」と平行している[49]。ヒトラーが聖書という、民衆にとってはなじみ深い（古典の）言葉を利用することで、民衆はまるで福音書を聞いているかのようにこれを受け入れてしまう。聖書だけでなく、キリスト教について直接言及している例もある。それは、「キリストは世界の敵であるユダヤ人に対する闘争において最大の先駆者だった。キリストはかつて地上に生きた最大の闘争的な人物だ。・・・・イエスが開始して、しかし最後まで貫徹しえなかった課題を私は完成するであろう。」というのである[50]。これは明らかにヒトラーが、自分自身をイエスに例えたも

のである。自分はイエス・キリストのような救世主であることを民衆に示し、またユダヤ人に対する感情も、キリストを利用して当然憎むべき相手だということを民衆に受け入れさせるのである。そしてヒトラーは、自分はイエスのような存在であるが、最後に十字架に掛けられるようなことはないことも同時に民衆に伝えるのだった。つまりイエス・キリストと同じく、ヒトラーも崇拝すべき存在、すなわち神であるかのように民衆は認識してしまうのである。ナチズムは、キリスト教にとって代わろうとしたが、そのためにキリスト教に敵意を向けるのではなく、古い宗教的メタファーを新しい政治的現実に援用したのである。キリスト教的用語に含まれる超越的なもの、神秘的なものを利用してナチズム体制を神聖化し、正当化しようと試みた[51]。民衆はこのヒトラー演説を聞くことで、救世主としての総統というイメージを、心の中で創り出していったに違いない。

ヒトラーは演説の効果については、政権を獲得するずっと前からよく認識しており、完璧といえる成功を生み出した。民衆に対し直接その姿を見せることも重要であり、実際その光景を目にしながら聴くことによってヒトラーの言葉を現実のものとして受け入れるのだった。また、民衆にとって理解しやすいものとするためにあらゆる手段を使い、この工夫を変わることなく使い続け、戦争さえも正当化し、また民衆に戦争を盲目的に支持させるレトリックを駆使したのである。ヒトラーの演説内容はともかく、演説するヒトラーの姿は本物であり、ナチズムにより作り上げられた空虚なものではない。これこそがヒトラー崇拝を呼び起こす最大の源泉となったのである。

(4) 民衆向けプロパガンダとヒトラー・イメージの構築

ここで注目したいのは、民衆がヒトラーやナチによるプロパガンダを、その内容よりはるかにプラスに捉えていたということである。つまり、民衆側が勝手に抱いたヒトラー・イメージがあった。民衆のイメージ創りがエスカレートし、ヒトラー・イメージをよりよいものへと作り上げる上で、「リトル・ヒトラーズ」と呼ばれた党の幹部たちの存在を忘れてはならない。「リトル・ヒトラーズ」がどのようにして影響を与えたかというと、経済不況や失業によるドイツ

国民の不満がある中で、ナチ宣伝によるヒトラー・イメージが民衆に受容されにくくなったとき、その不満の矛先をヒトラーへ向けるのではなく、とりわけそのとり巻きである党の幹部「リトル・ヒトラーズ」へと向けたのである。レーム事件をはじめとして、地方のナチ指導者たちに対する民衆のイメージが悪化していたことから、このようなことが起きたのであった。例えば、ミュンヘン東方の小都市エーベルスベルクとその周辺部の状況を見てみると、住民の大多数はナチ党の地区支部長で第二市長であった者に反対の姿勢を示していた。それはその地区の民衆の生活状況が良くなかったことによる。1934年11月のこの町の警察署の報告では、農民地区の市民が「彼らが他の誰よりも愛し、真に国民のことを考えていると信じている指導者ヒトラーの命令なら、彼らは完全に賛成する。しかし何もできない奴らの命令には絶対に従わない[52]。」とある。ヒトラーはすべての批判から除外されているのである。民衆は、ヒトラーと党をわけて考えていた。バイエルンの例を挙げると、1934年の秋、約束された党の浄化が行われてはいないのではないかという不満が、民衆の間で現れた[53]。しかしヒトラーは、このときも批判からは除外されたのである。ある町の警察署の報告によると、「指導者にして首相であるアドルフ・ヒトラーに対する大なる共感が、民衆を支配している。彼の人格を非難する声は全く聞かれない。しかし、このような声がひそかにささやかれている。『そうだよ、ヒトラーが全部を一人でできるのなら、多くのことが今とは違っていたろう。彼だってあらゆることを見張ることはできないんだ。』」というものである[54]。また、「フューラーは国民に尽くそうとしている。しかし党は真の粛清を必要とする」といった感情が至る所で広がっていた[55]。こうした状況は大都市においても同じであり、アウグスブルクからの報告によれば、党の幹部が市中を乗り回す大きな車は、貧しい市民層の不快の種であったという。ここでは、党地方幹部の不道徳な振舞が非難の的となっていた。例えば、「労働戦線の指導者ロベルト・ライは、アウグスブルクに滞在中、完全に泥酔した上、ホテルで夫人以外の女性と寝た」、「ベルリンの宣伝省からやってきたツィルキンスという部長は、ホテルで多くの客を前に酔って醜態をさらした」などという噂が広がっていたのである[56]。とにかく民衆は何か怒りをぶつける対象（地方幹部）を見

つけ、政治とはあまり関係のない事柄であるにも拘らず、何かしら彼らの悪態を見つけて悪い状況をすべて彼らのせいにするのであった。理想化されたヒトラー・イメージと党の下級指導者たちに対する非難とが共存した背後には、民衆の現状に対する失望感があったのである。もしヒトラーが「リトル・ヒトラーズ」のよからぬ状況を少しでも知れば、直ちに対応してくれるだろうという確信により、ヒトラー自身は不評から守られ、ヒトラー・イメージが傷つけられることはなかったのである。

また、この後さらに状況が悪化し、ヒトラー・イメージが崩れかかるかと思われる時には、地方党幹部だけでなく党中央のヒムラーやゲッベルスなども「リトル・ヒトラーズ」として民衆から批判的に見られるようになった。例えば、仕立屋をしていた者の意見に次のようなものがある。「体制の内部には反ヒトラーの暗闇が絶えなかったんだ。連中は汚い手を使っていた。ヒムラーやゲッベルスなんて大嫌いだった。ヒトラーが本当のことを聞かされていたらものごとはかわっていた。」[57]。また、ユダヤ人虐殺の噂が広まった時でさえ、集金人だったある男は次のように述べている。「ユダヤ人を殺したのは確かに間違いだった。ただし、彼らが戦時下で裏切りをしていなければの話ですがね。しかしもちろん奴らは裏切った。・・・・しかしこれだけは言えます――やったのはヒムラーだった。ヒトラーはいっさい関係なかった[58]。」このような考え方は、ナチのプロパガンダでも、ヒトラーの言葉でもない、民衆が創り出したヒトラー・イメージなのである。ヒトラーを受け入れる側からも、ヒトラー崇拝の重要な要素が発信されていた。いずれにせよ、ナチの作るヒトラー・イメージと民衆の作るヒトラー・イメージとがうまく重なり合い、誇張されたヒトラー像が一人歩きし始めたのであった。

第三節　勝利の日々

(1) ミュンヘン会談

ヒトラーの外交政策の中で、唯一民衆の不安をかき立てるものは戦争への恐怖であった。戦争への恐怖感は、公然たるもの、潜在的なものを含めて根強いものがあった。ゆえに、大衆に大きく影響したのは、ヒトラーはドイツの国際

政治上の復権だけでなく、平和の維持にも心を砕く指導者だとするプロパガンダであった。

ヒトラーの対外政策は、当初は血を流すことなく順調に行われた。1938年のミュンヘン会談は、外交の勝利者にして平和の創出者というヒトラー像を生んだという意味で、重要である。

ミュンヘン協定によってドイツは、血を流すことなくズデーテンラントの地を獲得し、民衆はこれをヒトラー外交の勝利として熱狂的に歓迎した。過去の実績、とりわけズデーテン危機に続く勝利は、ヒトラーが外交の分野においてまさに不可謬であるという神話を生み出していた[59]。そしてここでヒトラーが、何よりも平和を欲しているというイメージが定着した。結果的にミュンヘン協定は、戦争への道を開く第一歩となるのであるが、西欧諸国が当座の戦争を避けようとするあまり、ヒトラーに見事なまでの外交を演じさせてしまったことが、こうしたヒトラー・イメージの構築に貢献してしまったのであった。しかしここでまた特筆すべきなのは、ヒトラーの決断力である。ヒトラーの外交上の決断力、そして行動力は目を見張るものがあり、それがイギリスなどを圧倒したことも忘れてはならない。

(2) 開戦

ミュンヘン会談の結果、ヒトラーは、英仏は戦争に動かずとの判断を下した。そしてヒトラーは、イギリスとの妥協的和平を求めながらも、ポーランドを侵略して領土を拡張する計画を立てていた。ついに1939年9月から戦争という道を歩むことになったのであるが、戦争の最初の数ヶ月間は、またしてもヒトラーの天才的外交への熱狂を助長させるがごとき勝利の日々が続いた。

ヒトラーは電撃戦によって、ついにはフランスまでも敗北へと導いた。民衆は、あとイギリスさえ敗北へ追い込むことができれば、ドイツに豊かな生活が戻ってくるのではないかと考えた。何よりヒトラーにならそれができるのではないだろうかと考え、「ヒトラー崇拝」は頂点に達していた。もちろんこうした状況をヒトラーはしっかりと把握しており、ナチ党の反英的プロパガンダにより、民衆のイギリス撲滅の願望を駆り立てた。リッベントロップも、

イギリスにはかなり敵意を抱いており、「ドイツとイギリスのような二本の大木は、どちらが強いのか決定することなく、密接し、並存することはできない。」といったスローガンを掲げていた[60]。そして唯一、このときだけ国民全体に「戦争ムード」と呼べる雰囲気、イギリスとの講和はどのようなものでも早すぎる、あるいは寛大に過ぎると考える気分が支配するに至った[61]。しかし、初めヒトラーは、まだイギリスとの講和の可能性に期待しており、イギリス侵攻の必要性には疑問を抱いていた。ヒトラーは、なぜイギリスが平和の道をまだ進もうとしないのかという疑問に最も悩んでいた。彼は、イギリスはロシアに期待しているという見方をしていた[62]。ヒトラーはおそらく、イギリスがロシアに手をつける前に、何としても阻止したかったのであろう。そして1940年7月19日、ヒトラーは最後の対英和平提案の演説を行った。その内容は、大英帝国存続、欧州におけるドイツの最強国としての地位の確認、旧植民地返還の要求、永続的な独英同盟の締結などであった。もちろんこの要求に対し、イギリスが応じることはなく、ヒトラーは遂にイギリス攻撃を開始するのであった。イギリスに対してドイツは、空襲を繰り返し行っていった。40年秋にはすでに、イギリスに対する「あしか作戦」が完全に破綻していたが、これらの作戦は国内の日常生活にほとんど影響を及ぼしていなかったので、ヒトラーに対する信頼は無傷のままであった。やはり相手がイギリスともなると、これまでのようには順調に勝利を得ることができなかった。このように戦争が長引くと、民衆の間には戦争の早期終結を求める声が高まりはじめた。しかし民衆による、ヒトラーなら戦争を勝利に終わらせるだろうという素朴な、ほとんど宗教的な信仰が、ヒトラーへの信頼を支えていた。対英戦争は、作戦が延期される場合が多く、戦争は国民が期待するよりもはるかに長い時間がかかっていた。こうして高まってくる不安をその都度解消したのが、ヒトラーの演説であった。従って、ヒトラーが民衆の前で演説をする回数が減ったり、姿を見せなくなったりすることが、民衆にとっては一番の不安の種であった。民衆は、ヒトラーが演説で戦争の勝利を告げてくれるだろうと信じ込んでいた。ヒトラー崇拝にとって不利な状況、つまり戦争の長期化という困難は、前節で述べた「リトル・ヒトラーズ」の存在によって助けられていたが、しかし、ヒトラーの大きな威

信は、すでに戦前のものとは別の性格のものになっていた。

このようにヒトラーは、比較的少ない犠牲によって得られた電撃戦での勝利を強調し、早急な講和の見込みを演説でほのめかすことによって、その名声をさらに高めた。これらは、ナチ党のプロパガンダやヒトラーの演説の産物であったが、もはやこの時期はそれだけではなかった。つまり民衆の素朴な信仰が、何よりも「ヒトラー崇拝」を支えていたのだった。

第三章　ヒトラー崇拝の崩壊

1．戦況の悪化と崩れ始めたヒトラー・イメージ

1939年9月から、戦争が開始された。すべてがヒトラーの思い通りにいったわけではないが、少なくともナチ党のプロパガンダを信じる民衆は、その戦争がすばやくかつ少ない流血によって勝利に終わると信じていた。しかし西欧諸国に対する勝利の結果、1941年1月9日にヒトラーは宿敵スターリンに対する予防戦争として、ソ連攻撃計画を企てた。対ソ戦の勝利によってドイツがヨーロッパの支配者になることをイギリスに認めさせ、東欧に生存圏を確立するための行動の自由を得るという、ヒトラーが描いていた将来像を実現しようとするものであった[63]。さらにヒトラーは、ロシアは将来もはや力を持つことなく、他国の助言なしには何もできない国になると見ていた[64]。しかしそのシナリオはそのまま実現することはなかった。実際に同年 6月22日にロシア侵攻が始まると、決定的にドイツに不利な方向へと向かっていくのだった。

ロシア侵攻を開始してから、戦争の早期終結は無理という失望感が生まれて国民の士気は低下し、さらに続く戦争によりその士気は回復することはなく、ヒトラーに対するイメージにも影響が及び始めた。

ヒトラーは、レニングラード占領を第一に目指していた。41年9月4日、レニングラード砲撃を開始し、地上軍で包囲孤立させて残滅した。そして次なる目標はモスクワであった。そしてヒトラーは、「哀れむべきロシア人をボリシェヴィズムから解放してやるのは、ドイツの世界政策を遂行し、ドイツを安全にするためであり、我々は決してこれらの地域から出ることはないであろう。」と主張した[65]。しかし、最高司令官のフォン・ブラウヒッチュが解任され、

ヒトラー自身が指揮権を取るに至ったというニュース、そして何よりもロシアでの進撃が停滞し、モスクワ前面でのロシア軍の反撃によってしばしの後退を余儀なくされたというニュース、さらには米国が参戦したというニュースは、第二次世界大戦開始以来、初めてドイツ国民に大きなショックを与えるものであった[66]。それに加えて以前からあった、ユダヤ人や精神病患者、治癒不能と目された病人が殺されているという噂が広がり、深刻な動揺を引き起こしていた。これに対し、ナチ党もすぐに対応し、これを知ったヒトラーがすぐに停止を命じたという噂を流布させ、ヒトラーには何も知らされずに行われていたと信じさせ、ヒトラーに対する信頼を失わせないようにした。しかし、戦争終結の気配が見えてこないことにより、ヒトラーの演説、ナチのプロパガンダは効力を失いつつあり、民衆によるヒトラー・イメージは変化し始めていたのであった。

また、党内においても、ヒトラーへのイメージは変化しつつあった。1939年からの独ソ関係を記録している文書には、この頃ヒトラーには多くの苦労があり、同情する者もあったということが記されている。しかし側近の者たちがヒトラーのためにと考え行ったことも、ヒトラーから見れば出すぎた行動であり、気に入らないと判断すれば確実に殺されていた[67]。こうしたことが増え、党員の信頼も失われつつあったのだろう。

このように「ヒトラー崇拝」に陰りが出てくる中で、その崩壊を決定的なものにしたのは、スターリングラードでの敗北といえるだろう。人的被害は急速に膨れ上がり、兵役も18歳から45歳までに拡大されたことにより、民衆の不安は募る一方であった。42年9月30日にベルリンでヒトラーの演説が行われることとなり、民衆は今度こそはという気持ちで期待した。しかしその演説の内容は、夏期の攻勢のほんの一部の成功と、過ぎた冬の戦闘の苛酷な試練をいかにうまく乗り切ったか、そして本国の食糧事情にも改善の希望が高まっているということだけであった。これを聞いた民衆は、ナチのプロパガンダやヒトラーの演説が現実に相応していないのではないかと疑問を持つようになり、徐々にヒトラーの真の姿を覆い隠していた理想化されたヒトラー・イメージがはがれ始めたのである。こうして、ヒトラーに対する無条件の信頼感の大衆的

基盤が失われていった。公然たる反対に対する国家秘密警察の弾圧は以前よりも増していた。民衆はそれを恐れていたので、表向きは恭順の意を表していたが、陰ではドイツ式敬礼が行われなくなったり、ヒトラーやナチ党が厳しい民衆のジョーク、皮肉や警句の対象となったりしていた。こうしたジョークでは、ナチズムの政治宣伝のやり方を真似て、極めて単純化された言い回しが用いられており、例えばナチ党のスローガン「アドルフ・ヒトラーは約束したことを決して破らない」を作り変えて「ヒトラーは犯した犯行を決して言わない」などがある[68]。ドイツがこうむった人的損害に関するヒトラーの言い分を受け入れようとする者がもはやほとんどいなかったことは、いかに信頼が低下していたかを明瞭に示している。今までヒトラーに対する非難のないことだけが唯一の土台であったが、いまやそれすら崩壊目前であった。しかし、いまなお強大な力をもつ少数派が、「ヒトラー崇拝」を最後の局面まで持ち越したことも忘れてはならない。

2．破局

このように崩壊していく「ヒトラー崇拝」を、なおも支えた人々も数多くいたことも述べておきたい。それに関係して、ヒトラー暗殺計画が「ヒトラー崇拝」を支える役割を担っていた面があることも重要である。ヒトラー暗殺計画というのは数多く存在した。何人かの人が暗殺を計画し、かなり実現にまで近づいているのだが、なぜかヒトラーは危ういところで死を逃れている。例えば数分の違いで爆弾が爆発し、表沙汰にはならなかったものの、ヒトラーは死の一歩手前まできていたことも何度かある。しかしどの暗殺計画も失敗に終わっていた。そしてドイツの敗戦が間近に迫っていた1944年7月20日に行われたヒトラー暗殺計画は、ヒトラーから離れていくナチ党員や民衆に再び忠誠心を取り戻させる結果となった。これは、ベルリン予備軍の参謀本部に勤務するフォン・シュタウンベルク大佐が、次こそはと決死の覚悟で臨んだ暗殺計画であった[69]。ヒトラーが総司令部に国防軍首脳を招集して会議を開くことにした。会議はヒトラーの、コンクリート造りの地下壕で行われる予定であったのだが、あまりにも暑すぎるだろうという総統の意見で、直前にこの種の

会議を開くことのできる広さにある木造舎に変更された。この決定がヒトラーの命を救うことになった[70]。民衆はそれについて、ヒトラーはまさに神秘的能力を持っていると考え、一時的に士気は回復していた。

1945年に入り、ドイツ軍はもうすでに壊滅的状態であり、もはや戦える状態ではなかった。部下たちがやむを得ず降伏していく中で、ヒトラーはそれを裏切り行為として激怒するも、ヒトラー自身も以前のような強気な姿勢を見せることはなくなっていた。しかし4月28日にヒムラーが無条件降伏を西欧連合国に申し入れたということを知ると、これを裏切りと見たヒトラーが憤激のあまり顔面蒼白になるほどであった[71]。民衆もドイツ兵たちもいまやナチ党のプロパガンダを全く信じようとはせず、神のように崇拝されていたヒトラーに対し次のような皮肉が伝えられている。「フューラーは神からつかわされた。しかしドイツを救うためではない。ドイツを堕落させるためである。神はドイツの絶滅を決意された。ヒトラーはこの神意の執行者だ[72]。」もはや「ヒトラー崇拝」は崩壊していた。ヒトラーの死と同時に「ヒトラー崇拝」は消滅することとなる。

結語

ここまで考察してきたように、「ヒトラー崇拝」は、ヒトラーが政治家を志す前から徐々に始まり、権力掌握とともに確立したといえる。しかし、ヒトラー崇拝は戦局の悪化とともに失われていき、ヒトラーの自殺により決定的終焉を迎えた。

「ヒトラー崇拝」を作り上げた要素として、当時の国の状況、ナチのプロパガンダ、ヒトラーの演説がある。そしてそれに加えて重要な要素が「民衆」であった。

民衆は、当時の経済状況により、ナチのプロパガンダによるヒトラーの虚の姿を信じてしまったという従来の通説を否定することはできない。しかし、「ヒトラー崇拝」は、ナチが一方的に発信して作り上げたのではなく、ここでは民衆も「ヒトラー崇拝」を作ることに参加しているということが重要なのである。また、民衆が信じたものはすべて、ヒトラーの虚像であったというのは間違っ

ている。ヒトラーが演説する姿というのは、ヒトラーしか持ち得ない、誰も真似ること、創り上げることなどできない姿であり、そのカリスマ性は、ヒトラーの真の姿なのである。

また、一般大衆のなかでナチが実際にしていることを知っていた者、党員の中にも、しっかりと状況判断ができた者はいた。高校教師であったハインリヒ・ヒルデブラントは、ナチ支配が始まったころからナチ体制を抑圧気味に思っていた、と語っている[73]。そしてブリューニングやパーペン、その他多くの者たちは、戦後の回想録の中で、ヒトラー内閣は崩壊するだろう、間違ったことをしていることはわかっていたと述べる。そして止めようとしたが、できなかったと述べるものが多い。また、山口定は、ヒトラー内閣の成立を許してしまってからでは、反対をしようにもあまりにも遅すぎた、と述べている。彼らも、それを見て見ぬふりをして、ヒトラーのイメージを創り出すことに好んで参加していた。その結果が、ヒトラー・イメージの一人歩きであり、戦争敗北へと繋がっていったのである。もちろん当時の民衆の暮らしは想像を絶するものであっただろう。正しい判断を下すことはかなりの困難だったかもしれない。しかし、ヴァイマル体制を分析したカール・ディートリヒ・ブラッハーの言う、「ナチズムの勝利が決して避けられないものではなかった」ということにも注目したい[74]。エーリヒ・フロムが言うように、人間は深層心理において、人を支配する力を求めようとする切望と、圧倒的に強い外部の力に服従しようとする憧れを持っており、ナチのイデオロギーと実践は、民衆のそれらの欲望を満たし、民衆は支配や服従を楽しんでいたとは言わないまでも、ある程度率先して従っていたのは確かである[75]。そういった彼らに希望を与えたのは、力強いヒトラーの姿、演説であった。しかし戦争が始まったことで、そのヒトラーの魅力も消え失せた。そこで民衆も党員も気づかなければならなかった。ここで、民衆はいかなる環境においてもヒトラーを信じなければならなかったのか、という問いがやはり出てくるのである。

演説内容は別としても、ヒトラーの演説の仕方、彼の政治的直感、判断力、決断力という彼自身のもつ特殊な能力が、民衆やナチ党員を魅了した。これらはプロパガンダにより創り上げられた虚像ではなく、ある程度はヒトラー

の実像に相応したものであった。また、本論に述べられた「リトル・ヒトラーズ」に関する想像は、民衆たちの側の勝手な妄想である。魅力のなくなったヒトラーを支えたものこそが、民衆や党員の創り出したヒトラー・イメージだったのである。これらのヒトラー・イメージは、「ヒトラー崇拝」にとって欠かすことのできない重要な要素であった。

---

1 山口定著『ファシズム』有斐閣　1979、11頁。

2 山口定著『ナチ・エリート』中央公論社　1976、3頁。

3 同書、4頁。

4 山口定著『ファシズム』、4頁。

5 山口定著『ナチ・エリート』、254頁。

6 エーリヒ・フロム著（日高六郎訳）『自由からの逃走』創元新社　1951、232頁。

7 同書、232頁。

8 同書、231頁。

9 山口定著『ファシズム』、6頁。

10 Ian Kershaw, The *'Hitler Myth'*, Oxford, New York, 1987, p. 3（イアン・カーショウ著（柴田敬二訳）『ヒトラー神話』刀水書房　1993、4頁。）.

11 Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 4（柴田訳『ヒトラー神話』、4頁。）.

12 Adolf Hitler, *Mein Kampf*, Bd. I, München, 1925, S. 138（アドルフ・ヒトラー著（平野一郎・将積茂訳）『わが闘争』（上）角川書店　1973、17頁。）.

13 Hitler, *Mein Kampf*, Bd. I, S. 180（平野・将積訳『わが闘争』（上）、237頁。）.

14 ヴェルナー・マーザー著（村瀬興雄・栗原優訳）『ヒトラー』紀伊國屋書店　1969、90頁。

15 同書、94頁。

16 同書、94頁。

17 阿部良男著『ヒトラー全記録』柏書房株式会社　2001、58頁。

18 Walther Hofer, *Der Nationalsozialismus, Dokumente1933-1945*, Frankfurt, 1957, S. 19.

19 村瀬興雄著『ヒトラー　ナチズムの誕生』誠文堂新光社　1962、380頁。

20 Adolf Hitler, *Mein Kampf*, Bd. II, München, 1925, S. 619（平野・将積訳『わが闘争』（下）角川書店　1973、255頁。）.

21 イアン・カーショウ著（石田勇治訳）『ヒトラー権力の本質』白水社　1999、67頁。

22 阿部良男著『ヒトラー全記録』、191頁。

23 ルイス・スナイダー著（永井淳訳）『アドルフ・ヒトラー』角川書店　1998、63頁。

24 阿部良男著『ヒトラー全記録』柏書房　2001、220頁。

[25] ジョン・キーガン著（芳地昌三訳）『ナチ武装親衛隊』サンケイ出版　1985、45 頁。
[26] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 85（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、91 頁。）.
[27] Christian Zentner/Friedemann Bedurftig, *Das groβe Lexkon des Dritten Reichs*, München, 1985, S. 234 f.
[28] 佐藤卓巳著『大衆宣伝の神話』弘文堂　1994、230 頁。
[29] Zentner/Bedurftig, *Das groβe Lexkon des Dritten Reichs*, München, S. 246.
[30] Hitler, Mein Kampf, Bd. I, S. 197（平野・将積訳『わが闘争』（上）、259 頁。）.
[31] 宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』岩波書店　2002、44 頁。
[32] 同上、45 頁。
[33] ジョージ・L・モッセ著（佐藤卓巳・佐藤八寿子訳）『大衆の国民化』柏書房　1994、93 頁。
[34] 宮田光雄著『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店　1991、201 頁。
[35] Tilman Allert, *Der deutsche Gruβ*, Frankfurt, 2005, S. 10.
[36] Ebenda, S. 46.
[37] Ebenda, S. 46.
[38] 宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』、46 頁。
[39] 宮田光雄著『ナチ・ドイツの精神構造』、209 頁。
[40] J. P. Stern, *Hitler: The Führer and the People*, Hassocks, 1975, p. 35（J・P・スターン著（山本尤訳）『ヒトラー神話の誕生』社会思想社　1983、52 頁。）.
[41] Hitler, *Mein Kampf*, Bd. I, S. 469（平野・将積訳『わが闘争』（下）、56 頁。）.
[42] Hitler, *Mein Kampf*, Bd. I, S. 17（平野・将積訳『わが闘争』（上）、3 頁。）.
[43] Hitler, *Mein Kampf*, Bd. I, S. 197（平野・将積訳『わが闘争』（上）、259 頁。）.
[44] Stern, *Hitler The Führer and the People*, p. 38（山本尤訳『ヒトラー神話の誕生』、57 頁。）.
[45] 宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』、4 頁。
[46] *Vokabular des Nationalsozialismus, Cornelia Schmitz-Berning,* Berlin, 1998, S. 23, 37.
[47] Stern, *Hitler The Führer and the People*, p. 38（山本尤訳『ヒトラー神話の誕生』、56 頁。）.
[48] Stern, *Hitler The Führer and the People*, p. 90（山本尤訳『ヒトラー神話の誕生』、133 頁。）.
[49] 宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』、14 頁。
[50] 同書、13 頁。
[51] 宮田光雄著『ナチ・ドイツの精神構造』、186 頁。
[52] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 98（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、103 頁。）.
[53] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 98（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、103 頁。）.

[54] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 98（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、104頁。）.

[55] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 101（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、106頁。）.

[56] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 102（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、107頁。）.

[57] ミルトン・マイヤー著（田中浩・金井和子訳）『彼らは自由だと思っていた』未来社　1963、52頁。

[58] 同書、72頁。

[59] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 139（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、148頁。）.

[60] Ernst von Weizsäcker, *Erinnerungen*, München, 1950, S. 131.

[61] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 157（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、166頁。）.

[62] Generaloberst Halder, *Kriegstagebuch*, Bd. II, Stuttgart, 1963, S. 21.

[63] カーショウ著『ヒトラー権力の本質』、194頁。

[64] Peter de Mendelssohn, *Die Nürnberger Dokumente*, Wolfgang Krüger Verlag Hamburg, 1947, S. 288.

[65] 永岑三千輝著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆1941－1942』同文館　1993、123頁。

[66] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 176（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、186頁。）.

[67] Mendelssohn, *Die Nürnberger Dokumente*, Wolfgang Krüger Verlag Hamburg, 1947, S. 287.

[68] 宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』、134頁。

[69] スナイダー著『アドルフ・ヒトラー』、179頁。

[70] 同書、182頁。

[71] 阿部良男著『ヒトラー全記録』、639頁。

[72] Kershaw, The *'Hitler Myth'*, p. 220（柴田訳『ヒトラー神話』刀水書房　1993、235頁。）.

[73] マイヤー著（田中浩・金井和子訳）『彼らは自由だと思っていた』、52頁。

[74] K. D. ブラッハー著（山口定・高橋進訳）『ドイツの独裁II』岩波書店　1975、927頁。

[75] フロム著『自由からの逃走』、258頁。

参考文献一覧

阿部良男著『ヒトラー全記録』柏書房　2001。

小岸昭著『世俗宗教としてのナチズム』筑摩書房　2000。

イアン・カーショウ著（柴田敬二訳）『ヒトラー神話』刀水書房　1993。

イアン・カーショウ著（石田勇治訳）『ヒトラー権力の本質』白水社　1999。

ワルター・カラー著（柴田敬二訳）『ファシズム　昨日・今日・明日』刀水書房　1997。

ジョン・キーガン著（芳地昌三訳）『ナチ武装親衛隊』サンケイ出版　1985。

アウグスト・クヴィツェク著（橘正樹訳）『アドルフ・ヒトラーの青春』三交社　2005。

栗原優著『第二次世界大戦の勃発』名古屋大学出版会　1994。
佐藤卓巳著『大衆宣伝の神話』弘文堂　1994。
W・L・シャイラー著（井上勇訳）『第三帝国の興亡』東京創元社　1961。
J・P・スターン著（山本尤訳）『ヒトラー神話の誕生』社会思想社　1983。
ルイス・スナイダー著（永井淳訳）『アドルフ・ヒトラー』角川書店　1998。
永岑三千輝著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941－1942』同文館　1993。
アドルフ・ヒトラー著（平野一郎・将積茂訳）『わが闘争』（上）（下）角川書店　1973。
アドルフ・ヒトラー著（古田八岑訳）『ヒトラーのテーブル・トーク 1941－1944』（上）（下）三交社　1994。
藤村瞬一著『ヒトラーの青年時代』刀水書房　2005。
K・D・ブラッハー著（山口定・高橋進訳）『ドイツの独裁』Ⅰ・Ⅱ、岩波書店　1975。
ハインリヒ・ブリューニング著（三輪晴啓・今村晋一郎・佐瀬昌盛訳）『ブリューニング回顧録 1918－34' 上巻』ぺりかん社　1974。
エーリッヒ・フロム著（日高六郎訳）『自由からの逃走』創元新社　1951。
ミルトン・マイヤー著（田中浩・金井和子訳）『彼らは自由だと思っていた』未来社　1963。
ヴェルナー・マーザー著（村瀬興雄・栗原優訳）『ヒトラー』紀伊國屋書店　1969。
E・マティアス著（安世舟・山田徹訳）『なぜヒトラーを阻止できなかったか』岩波書店　1984。
宮田光雄著『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店　1991。
宮田光雄著『ナチ・ドイツと言語』岩波書店　2002。
村瀬興雄著『ヒトラー　ナチズムの誕生』誠文堂新光社　1962。
村瀬興雄著『ナチズムと大衆社会』有斐閣　1987。
村瀬興雄著『ナチス統治下の民衆生活』東京大学出版会　1983。
ジョージ・L・モッセ著（佐藤卓巳・佐藤八寿子訳）『大衆の国民化』柏書房　1994。
ジョージ・L・モッセ著（宮武実知子訳）『英霊』柏書房　2002。
山口定著『ファシズム』有斐閣選書　1979。
山口定著『ナチ・エリート』中央公論社　1976。
山口定著『ヒトラーの抬頭』朝日新聞社　1991。
Tilman Allert, *Der deutsche Gruß*, Frankfurt, 2005.
Heinrich Brüning, *MEMOIREN*, Stuttgart, 1970.
Max Fechner (Hrsg.), *Wie konnte es geschehen*, Berlin [1946].
Generaloberst Halder, *Kriegstagebuch Bd. II*, Stuttgart, 1963.
Adolf Hitler, *Mein Kampf*, 2 Bde., München, 1925.
Walther Hofer, *Der Nationalsozialismus, Dokumente 1933-1945*, Frankfurt, 1957.
Ian Kershaw, The *'Hitler Myth'*, Oxford/New York, 1987.

Peter de Mendelssohn, *Die Nürnberger Dokumente*, Wolfgang Krüger Verlag, Hamburg, 1947.

Franz von Papen, *Memoirs*, London, 1952.

J. P. Stern, *Hitler: The Führer and the People*, Hassocks, 1975.

Vokabular des Nationalsozialismus Cornelia Schmitz-Berning, Berlin, 1998.

Ernst von Weizsäcker, *Erinnerungen*, München, 1950.

Christian Zentner/Friedemann Bedurftig, Das Groβe Lexkon des Dritten Reiches, München, 1985.